ザビード——南アラビアの学術都市——

Zabīd——A Cultural City in the Southern Arabia——

栗山保之^{*}
KURIYAMA Yasuyuki

ABSTRACT Yemen is the southern region in the Arabian Peninsula. The Rasulids [626-858/1229-1454] was one of the flourished dynasties in Medieval Yemen. They succeeded in gaining control of most Yemen, from Ḥaḍramawt to Makka. In their realm Zabīd was the central city which situated on the Tihama facing the Red Sea. A number of Madrasas were constructed by them in Zabīd as well as in many other towns and villages. These Madrasas were built and maintained through *waqf* allocation. The ‘*ulamā*’ in Yemen gathered on Zabīd to study Islamic sciences. Their construction of Madrasas has two purposes. First, they wanted to show their legitimacy to subject Yemen to their rule. Secondly, they aimed to expand their own Sunnī authority against the Zaydī shi‘is, who were throughout the northern Yemen.

はじめに

アラビア半島の紅海側の底辺に横たわるイエメンは、従来、東西交渉史や環
インド洋世界史という外側からの視角による研究がなされてきた。他方イエ
メン史を内側から考察した研究は非常に少ない。これはイエメンがイスラム史展
開の中心舞台の外にあったことと、他のイスラム世界と比較して史的に貧弱
であったこととによる。近年、史料の欠如については、新史料の発掘や残存す
る写本類の校訂によって克服されつつある。また史料の増加にともないイエ
メン自体を扱った研究も現れ始めている。⁽²⁾

ラスール朝 (626-858/1229-1454) はイエメン史上最も繁栄した王朝である。
しかしイエメン史において、その重要性は未だ明らかではない。それはラス
ール朝史を含めて、未だイエメン史自体を取り上げた専論が少ないためである。

* 中央大学大学院生
Graduate Student, Chūō University

そこで本稿では、ラスール朝時代の一都市であるザビード Zabid におけるマドラサ等の建設活動を分析することによって、ザビードがラスール朝にとって如何なる意味を持っていたのかを考察し、イエメン史におけるラスール朝の位置づけの一助としたい。ザビードを取り上げる理由は、同都市がイエメン史上最も重要な都市のひとつであると考えられるからである。

ザビードに関する研究は、J. Chelhod によるその成立から同都市を中心とした王朝の興亡をオスマントルコの征服まで述べたものがあるものの、通史の域を出るものではない。⁽³⁾ また E. J. Keall はザビードやその周辺域から出土したイスラム期の陶片等の考古遺物の紹介にとどまっている。⁽⁴⁾ このようにザビードについては未だまとまった研究がないのが現状である。

I-1: ラスール朝以前のザビード

ティハーマ Tihāma は、イエメンの紅海沿岸を南北に広がる平原である。その二大部族 ‘Akk と Ashā‘ir は、202/817年にアッバース朝に反旗を翻した。⁽⁵⁾ その報を受けたカリフ・マームーンは、イブン・ズィヤード Muḥammad b. ‘Abd Allāh b. Ziyād をアミールに任命し、ティハーマに派遣した。彼は反乱鎮圧後、マームーンの命令によりティハーマの支配拠点となる都市を建設し、ザビードと名づけた。ここは先の兩部族が領有していた地域の間にも位置していたため、兩部族を牽制する軍事的機能を備えた都市であった。その後イブン・ズィヤードはカリフに毎年貢納することによってアッバース朝の支配を承認しつつ独立した。⁽⁶⁾ ズィヤード朝 (204-409/819-1018) は、ザビードを首都としてティハーマを領有した。その後、ほぼ同じ支配領域を継承してナジャーフ朝 (412-553/1021-1158) が成立した。同じ頃サナアを中心に北イエメンを領有したスライフ朝 (429-495/1037-1101) は、しばしばザビードへ南侵し占領した。ナジャーフ朝に代わって極く短期間だけザビードを支配したマフディー朝 (554-569/1159-1173) は、アデンを支配していたズライ朝 (476-569/1083-1173)、スライフ朝の次のハムダーン朝 (492-569/1098-1173) とともにアイユブ朝 (569-625/1173-1228) によって569/1173年に征服された。⁽⁷⁾ イエメン全土を支配したアイユブ朝もまた、ザビードをティハーマの軍事拠点としていた。

I-2: ザビードの立地条件

イエメンは、アラビア半島が不毛な砂漠によって大部分占められるという状況にあって、唯一可耕地をもつ地域である。中世イエメンにおける十分な降雨と灌漑システムの発達は、その景観を緑鮮やかなものにし、緑のイエメン al-Yaman al-Khaḍrā⁽⁸⁾ として知られるまでになっていた。このようなイエメンの中で、とりわけ農業生産性の高い地域のひとつがザビードを中心としたティハーマー帯であった。

ラスール朝時代の王室穀物課税簿には、ティハーマにおいて生産された穀物・果実などの種類、それらの播殖・収穫時期、課税査定時期が記されている。⁽⁹⁾ この時代の農作物はナツメヤシ・麦類・モロコシ類・黍類・胡麻などであった。これらは、次のような地域において生産された。すなわちザビード・al-Ka-drā'・al-Maḥālib・al-Maḥjam・al-Ṣulay・Laḥj・Abyan・'Adan・Aḥwar・al-Siḥr・al-Qaḥma・Fashāl・Ḥays・Mawza'・Ta'izz の周辺地域・Mi-khlāf・Ḥaraḍ である。これらのなかで例えばファシャールについては、「降雨のみを用いて800もの村々が黍やモロコシを栽培していた」という。⁽¹⁰⁾ 上記のうちアデンとシフルは、インドやモガディシオなどへの航海時期の記載なので除外すると、タイズ周辺とラフジ、アブヤン、アフワル以外はティハーマの地域であった。

またザビードは、古くからメッカ巡礼の中継都市でもあった。Ibn Khur-dādhbih は、オマーンからメッカへの海岸道 al-Saḥil の記述において、その途上にザビードを記している。⁽¹¹⁾ ラスール朝時代になってもザビードが、巡礼路の途上にあったことは変わらなかった。ハズラジ al-Khazraji の年代記には、ザビードから巡礼団が出発した記事や巡礼帰途の巡礼団がザビードに立ち寄った記事が散見している。例えば次のような記述がある。

797年ズー・アルカアダ月9日/1394年8月25日に巡礼団がメッカを出発し、同月13日/8月29日にザビード入りした。(中略)ザビードを同月14日/8月30日に離れた。同日ティハーマにおいて大雨と洪水、そして大風が発生し、これによって巡礼団を載せた5隻の船はスライマーニー地方の海岸に⁽¹²⁾沈没した。

このようにザビードは周囲に大量の人口を維持することができる農業生産性の高い地域をもち、また巡礼の通過都市でもあった。このため後述するように

ラスール朝時代に、ザビードは大きな発展を遂げたのである。

II-1：ラスール朝期のザビードにおける学術・宗教施設建設事業

ラスール朝時代のザビードに関する初出は、初代スルタン・ヌール・アッディーン Nūr al-Dīn が626/1229年にイエメン全土を掌握したことを伝える記事に見える。

スルタン・ヌール・アッディーンはティハーマの統治者としてザビードに駐屯した。彼はそこに彼の支配の基礎を構築し、それから彼はタイヅに向けて出発した。626年シャッワール月/1229年8月のことであつた。⁽¹³⁾

ティハーマを統治するためにザビードに拠点を置いたことを示すこの記事は、ラスール朝時代初頭においても引き続きザビードが軍事的行政的に重要な都市であったことを示している。

ザビードはアッバース朝時代のバグダードと同様に堅牢な城壁によって周囲を囲まれていた。7/13世紀における南アラビアの地理・歴史及び諸慣習に詳しい Ibn al-Mujāwir は次のように述べている。

私はザビードの物見塔 *abrāj* を見た。それは109あつた。それらの塔の間隔は80ジラーアであつた。そして全ての塔に20ジラーアが（塔の分として）加えられ、その都市の周囲は10900ジラーアになつた。⁽¹⁴⁾

都市の形状はこの記事からは分からないが、1982年のカナダ調査隊のザビードの遺構調査から、南北に長い楕円形をしていたようである。⁽¹⁵⁾ 1ジラーアを72.8 cm とすると、ザビードの外周は約 7.93 km であり、その規模は恐らく当時の南アラビアの中で最も大きい都市であつたと思われる。⁽¹⁶⁾

城壁によって囲まれた軍事都市ザビードには、ラスール朝以前、学術・宗教施設として若干のマスジドのみが存在していた。アイユーブ朝の支配下においては、わずかに Ibn Manqaz⁽¹⁷⁾ によって Masjid al-Munākh が建設されたにすぎなかった。またマドラサはアイユーブ朝支配下に初めてイエメンに導入され、ザビードに建設された。⁽¹⁸⁾ それは、アイユーブ朝のサンカル Sayf al-Dīn sanqar によって598/1201年に建設された Madrasa Ibn Daḥmān⁽¹⁹⁾ であり、他の都市にはなかった。このことはサラディンによるエジプトのマドラサやモスクの盛んな建設事業とは対照的であつた。ところがラスール朝による支配は、ザビードをはじめとして、従来のイエメン諸都市に大きな変化をもたらした。

巻末にあげた表はラスール朝時代のイエメンに建設されたマドラサをはじめとする諸建築をまとめたものである。

この表によるとラスール朝全般にかけて様々な建設事業がなされている。

建設者は歴代のスルタンとラスール家の者即ち母后・妻・娘であり、またアミールや官僚などラスール朝の支配権力に属するものであった。特に建設者の中でラスール家の女性たちは積極的な活動を展開し、建設事業に大きな貢献をしていた。

建築物で最も多いのはマドラサであり、過半数を占めている。次いでモスクがあげられ、その他ハーンカー、迎賓館 *dār muḍif*、道路 *sabil*、ダム *sadd* などが建設された。とりわけマドラサについてみると、この時代に一斉に各地に建設され、なかでもザビードには、ラスール朝支配権力によって、実に多くのマドラサが集中的に建設された。その結果ザビードは次のようになった。

795年ジュマードー月30日/1392年5月11日にスルタン・アシュラフ al-Ashraf はザビードにあるモスク、マドラサの数を数えるように命じた。

それらは、総計230余⁽²⁰⁾になった。

マドラサとモスクの総数が230以上あったという記事は巻末の表のそれとは合致しないが、これは恐らく地誌にも記録されない名もない施設をも含んだ分だと考えられる。いずれにしろ相当数のマドラサやモスクがザビードに建設されていたということは確認できる。

ワクフ制度が都市において果たしてきた役割については既に明らかであり、イエメンにおいても公共財の運営にはワクフが付与された。

al-Amir Shihāb al-Dīn Abū Muḥammad Ghāzī b. al-Ma‘amār は、スルタン・ムザファルのアミールの一人であるが、彼はハディースと説教 *wa‘ẓ* のミンバルを Masjīd al-‘Ashā‘ir に建設した。彼は諸店舗 *dakākin* ⁽²¹⁾ をそのワクフとした。

このように、ワクフ制度によってイエメンのマドラサ等の諸建設は成り立っていた。

しかし一方では、荒廃し廃虚となってしまった施設もあった。ラスール朝以前からのマスジド等の施設は、老廃して利用されなくなることもあった。ところがザビードについては、廃虚となった諸施設をスルタンらが修復活動を行っていた。

スルタン・アシュラフはカーディーンであるシラージ・アッディーン Sirāj al-Dīn al-Laṭīf b. Muḥammad Sālīm にザビードにあるモスク、マドラサ、公共の噴水の修理を命じた。(中略) 彼が修理したのは以下のものであった。(以下には多数の施設の名称が揚げられている) これらの修復された総数は65にもなった。⁽²²⁾

またこれほど大規模ではないが、スルタン・ナシール Nāṣir の母后による Masjid al-‘Ashā’ir をはじめとしたザビードの多くのマスジドの再建や、城壁の改築と門、外堀の修復活動などがザビードのみを対象に行われていた。⁽²³⁾ スルタンらによって施行されたザビードにおける修復活動は、ラスール朝支配権力による新たな建設事業とあいまって、ますます学術・宗教施設をザビードに拡充させたのである。

ところでラスール朝支配権力は、以上のようなザビードの都市空間における物質的変化をもたらしただけではなくた。

歴代のスルタンたちは、その多くが自らも学者であったため、大いに学問を奨励した。例えば第3代スルタン・アシュラフは天文・暦法の著作やイエメンの農業を論じた。第7代スルタン・アフダル al-Afḍal は法学者であり、諸科学に通曉し、アラブの部族の慣習を熟知していた。残存する彼の著作の中で最も重要なものは、イエメンにおける農業技術を説いた農業書である。⁽²⁴⁾ また第4代スルタン・ムアッヤド Mu‘ayyad は、自らの図書館に10万冊に達するまでコーランの収集に励んだという。⁽²⁵⁾ Jamāl al-Dīn ‘Abd Allāh al-Rīmī というザビードにて教鞭を取っていた著名なウラマーによる法学書の作成に対して、スルタンは48000ディルハムもの報償を下賜したし、天文学、幾何学といった自然科学の分野において比肩する者がいなかった Badr al-Dīn Ḥasan b. Aḥmad b. al-Mukhtār のイエメンへの招請などをおこなった。⁽²⁷⁾ Raḍā al-Dīn Abū Bakr b. Muḥammad b. ‘Umar al-Yaḥyawī はメッカ巡礼の折、イスラム神秘主義思想家のイブン・アラビーの著作の多くを写し、イエメンへ戻った。ザビードにて生涯を送った彼の元にはアミールなどの有力者が訪れた。⁽²⁸⁾ 第4代スルタン・ムアッヤドは即位以前から彼と親交があったという。とりわけ Majd al-Dīn al-Firūzabādī al-Shirāzī (729/1329-817/1415) の招致は、ラスール朝スルタンらの学術に対する姿勢を示す好例であろう。マジドアッディーンはその名が示すようにイラン南西部のシーラーズ近郊にあるフィールザバードの

出身であり、生涯をイェルサレム・メッカ・イエメンにおいて過ごした。⁽²⁹⁾ マク
 リービーが述べるように彼には多くの著作があり、その中でも *al-Qāmūs* と
 いう言語辞典は、最も有名であった。⁽³⁰⁾ 彼のイエメンにおける活動を以下に揚げ
 てみよう。796年ラマダーン月24日/1395年6月25日にアデンに到着したマジド
 アッディーンをスルタン・アシュラフは歓迎し、彼に4000ディルハムもの新し
 く鑄造した貨幣を与え、そしてアデンから当時スルタンが滞留していたタイッ
 ズに向かうためにさらに4000ディルハムを与えた。彼は797年ズー・アルハッ
 ジ月6日/1395年9月22日に大カーディーに任命され、またスルトンの娘と結
 婚した。797年シャーバーン月15日/1396年5月5日に彼はイスアード *al-Iṣ'ād*
 という本を上梓した。その本はドラムの演奏と歌手たちに従われつつスルタ
 ンの宮殿に運ばれ、宮殿には法学者、カーディー、学生の全てが集合していた。
 スルタンは彼の報酬として3000デュカット与えた。⁽³¹⁾ 以上のマジドアッディーン
 のイエメンにおける諸活動の記事から、学術的に著名な人物はイエメンの内外
 を問わずスルタンにより優遇されていたと思われる。ラスール朝歴代のスルタ
 ンたちは自らが学問に精通していたため諸学の担い手たちを大いに歓迎したの
 である。

以上のことから、ラスール朝支配権力は、ザビードにおける学問の奨励とマ
 ドラサ等の建設・維持活動を意欲的に行うことによって、ザビードを軍事的な
 都市から学術・宗教的な都市へと変えたといえることができるだろう。

II-2: ザビードを中心としたウラマーの展開

中世イスラム史において、ウラマーはイスラム諸学を修めるために、あるい
 は就職するために広く移動していた。⁽³²⁾ イエメンのウラマーについてもそれは同
 様であった。

ラスール朝史に関する重要史料のひとつにハズラジ *al-Khazraji* の *al-
 'Uqūd al-Lu'lu'īya fī Tārīkh al-Dawla al-Rasūliya* という年代記史料があ
 る。この史料には各年代の終わりにその年に死亡した多数の著名人の死亡録が
 収録されており、その中で最も数多く記載されているのがウラマーのそれであ
 る。著者のハズラジはサハーウィーによればシャーフィイー派法学者であっ
 た。⁽³³⁾ そのため彼は、当時北イエメンに割拠していたザイド派政権下のザイド派
 ウラマーの記述を残していない。

死亡録に収録されているウラマーの人数は 325 名であり、それらを没年ごとに整理すると以下ようになる。

〔ウラマー年代別人数〕

没 年 (年)	～640	660	680	700	720	740	760	780	800～
人 数 (人)	11	49	57	78	89	18	13	4	6

ハズラジの年代記に記述されている最後の年は 803 年であり、ラスール朝が滅亡した 858 年までのおよそ 50 年間の時期におけるウラマーの活動を明示することはできない。しかし上記の数値は、ラスール朝時代のおよそ四分の三以上をカバーしているので、大まかな動向はつかめ得るだろう。

これら 325 名のウラマーたちはイエメン各地において研鑽を積み、職に就いていた。彼らの活動地を数えた時、それらが死亡録から一箇所でも判明するウラマーは、325 名のうち全体の 60％にあたる 195 名である。イエメンにおける 195 名の活動地は 62 地域にのぼる。このうち当時の主要都市のみをあげると次のようになる。

〔ウラマーの活動地〕

活 動 地	ザビード	タイヰズ	ア デ ン	サ ナ ア	そ の 他
人 数 (人)	50	44	24	5	72
割 合 (%)	25	22	12	2	36

サナアはイスラム以前から交易によって栄え、イエメンで最初にイスラムを受け入れた都市にもかかわらず 2％と低い。後述するようにラスール朝時代には、近隣にザイド派勢力が存在していたためウラマーの活動も少なかったと考えられる。ザビードとそれに次ぐタイヰズとは人数的にはほとんど差がない。

ところでウラマーは通常、諸学を修得するために遠隔地であれ、より高名の者に師事することはよく知られている。それによってウラマー間には師弟関係が生じることになる。325 名のウラマーの師弟関係をその死亡録から抽出すると、27 の師弟関係ができる。このうち師となるウラマー 27 人の活動地が明らかなのは 22 人である。師弟関係は、この 22 人の師の活動地を中心にそれぞれ放射状に広がっていた。そこで 22 人の師の活動地をあげると次のようになる。

〔師弟関係拠点〕

拠 点	ザビード	タイIZZ	そ の 他	不 明
師弟グループ	8	1	13	3

195名のウラマーの活動地に関する表ではザビードとタイIZZとでは僅差であったが、この表ではザビードとタイIZZは大きい差が生じている。これは各師弟関係の師となるウラマーのマドラサ等での教育養成活動拠点がザビードに集中していたことを表している。ラスール朝時代のイエメンのウラマーは、その多くが、ザビードにて諸学を修得していたと考えることができよう。

III：ザビードと他のイエメンの諸都市との比較

当時ラスール朝治下のイエメンには、ザビード以外にも大きな都市があった。巻末の表には、それらが見える。ここでは、それらのうちアデン、サナア、タイIZZとザビードとの相違を見てみよう。

アデン ‘Adan の場合

インド洋に面したアデンは、古くから東西交渉上重要な国際交易港として機能していた。14世紀中葉のウマリーは当時のアデンをイエメンにおける最も大きい投錨地であり、イエメンの諸王の宝物庫であると端的に評している⁽³⁴⁾。しかしこのようなアデンには、巻末の表に見えるように、ラスール朝時代に建設されたマドラサやモスクは非常に少ない。「アデンの市民は、商人と担人、漁夫の三つにわかれている⁽³⁵⁾」というイブン・パットゥータの記述は、アデンがまさに商業活動を中心として機能していた都市であることを表している。それゆえ商業活動に伴う訴訟など法的活動等に携わるウラマーはいたと思われるが、他方では、マドラサ等での教育活動は、アデンにおいては副次的なものであったと考えられる。

サナア Ṣan‘ā’ の場合

イエメンを南北に走るサラート山脈の海拔 2200 m ほどの高地にあるサナアは、アラビア半島内の交易ルート上に位置していたため、ジャーヒリーヤ時代には既にその存在が知られていた。西暦1590年にアラブの囚人としてハドマウトからサナアに連行された二人のスペイン人イエズス会士 Antonio de Montserrat と Pedro Páez の記録には、「とても古い街であった。（中略）

そこには、おおくて2500軒あった」としている。⁽³⁶⁾当時のイエメンの主要都市の人口は分からないが、サナアは比較的多かったと思われる。ハラウィー al-Harawī (d. 611/1215) によれば、サナアには、Sām b. Nūḥ のモスクと Wahb b. Munabbih の墓があり、南アラビアの参詣地であったという。Sām b. Nūḥ とはサナアを建設したとされる人物である。⁽³⁷⁾Wahb b. Munabbih (34-114/654-732) はサナアにてカーディー⁽³⁸⁾をしていた。⁽³⁹⁾恐らく彼はラスール朝時代には聖者として参詣されていたと思われる。このようにサナアは当時人口が比較的多数であり、南アラビア内の参詣地のひとつであったことから、人々の来訪は盛んであったと考えられる。しかしラスール朝支配権力は巻末の表に見るようにサナアには極く僅かしか建設事業を行っておらず、ウラマーの活動も極めて少数であった。このような現象は、実はラスール朝時代の北イエメンの政治的宗教的情勢に起因していた。シーア派の一分派ザイド派は、Yaḥyā b. al-Ḥusayn al-Ḥādī ila l-Ḥaqq (d. 298/911) によってサアダを中心として、北はナジュラーン、南はサナアにまで拡大し北イエメン一帯に広がっていた。⁽⁴⁰⁾ウマリーがサナアの統治者はザイド派イマームであり、イエメンの統治者と区別していることから、サナアはラスール朝が政治的には支配下に治めていたものの、宗教的にはザイド派の領域であったと意識されていた。それゆえラスール朝支配権力はマドラサ等の建設を躊躇していたのである。

タイズ Ta'izz の場合

タイズは断続的な山脈と急峻な谷からなるイエメンの南部高原地帯の海拔1370 m の地にあった。タイズは「イエメンの諸要塞のなかで最も大きい要塞」⁽⁴²⁾と言われるほど堅牢な地であり、外敵からの防御が容易な地理的条件をもっていた。ラスール朝時代にはタイズは「王の玉座 sarīr 王の要塞 ḥiṣm」⁽⁴³⁾とされた。ラスール朝は対ザイド派勢力の為にタイズをラスール家の居住地にしたのである。イブン・バットゥータは次のように記している。

ここはヤマン王の都とするところで、壮麗な町ではあるが、王域の地によくあるように市民は傲慢で頑固である。市街は三つの区に分かれ、第一区には王やその一族、奴隸および大官が住み、第二区には將軍連とその軍隊⁽⁴⁴⁾が、最後の区には一般人が住んでいる。

タイズはマドラサ等の諸建設事業が盛んになされたため、ザビードと同様に数多くの学術宗教施設が存在し、ウラマーもまたやってきていた。その意味

ではタイイズもザビードと同様の性格をもった都市と考えられなくもない。しかし、この都市の最も重要な役割は、ザイド派勢力に対する軍事的役割であろう。それはかつてのザビードの役割を、ラスール朝時代にはタイイズが担うようになったことの表れである。

以上のようにアデン、サナア、タイイズの諸都市とザビードとは、その都市の性格が異なっていた。

IV：学術都市ザビード「建設」の目的

ラスール朝のスルタンら支配権力は、イエメンの各地にマドラサ等の学術・宗教的施設を建設した。とりわけザビードには、多くのマドラサ等が造営された。従来、軍事的な都市であったザビードは、ラスール朝支配権力によって学術的な都市へと変えられたのである。それによってザビードにウラマーが集中した。またザビードを中心として、その師弟関係はイエメン各地に展開した。

ザビードをこのように変えたラスール朝権力は、何らかの目的を持っていたと思われるが、年代記等の史料には、その目的を示唆する記事はない。しかし、当時のラスール朝の政治的宗教的状况から、彼らの二つの目的を伺い知ることができる。

569/1173年のアイユーブ朝のイエメン征服は、中世イエメン史上最も大きな事件であった。その地理的状况から、様々な人々がイエメンにいたが、元来、アラブであったイエメンを外国人勢力が征服したことなどなかったからである。

アイユーブ朝によるイエメン征服の目的は、東西交易の利潤独占のためであったといわれている。Ibn al-Athīr には次のようにある。

我々（トゥーラーン・シャーとアイユーブ朝軍）は、その国（イエメン）を破壊するために来たのではなく、それを占拠し、占領し、その歳入によって利益を得るために来たのである。⁽⁴⁵⁾

ここから彼らの征服意図は、イエメンからの収益獲得であったことは明らかである。家島氏によれば、アイユーブ朝は、アデンを中心としてインド洋の海運と貿易に介入しようとしたという。⁽⁴⁶⁾

またイエメン・アイユーブ朝の第2代統治者トゥグテキーン Sayf al-Islām Tughtiqīn b. Ayyūb は、イエメンの全耕作地を掌握しようとした。

トゥグテキーンは、ナツメヤシの民を不当に扱い、農民を厚遇した最初の

人物であった。諸地域 al-Bilad が、彼の下にあった時、彼自身、全イエメンの土地を耕すことを求める者に貸すため、土地を購入することを望んだ。しかし、それはエジプトの慣習 ⁽⁴⁷⁾ ‘āda Miṣr であった。

ナツメヤシの民とは、ナツメヤシを栽培しそれを成業としている者達であろう。この記事からは、彼らは農民と区別されていたことがわかる。支配者が土地を買い上げそれを貸し出すというのは、他のイエメンの史料に見えないため、どのようなことを具体的に示しているのか不明である。いずれにしろアイユーブ朝は、地租を徴収することも意図していたと思われる。このようにアイユーブ朝のイエメン征服は、イエメンを支配することによって得られる東西交易や地租等の収益であった。

しかし彼らは、エジプトから突如侵攻してきた外国人勢力であった。そのため彼らには、イエメン土着の人々に対して、何等その支配の正当性を主張し得るものがなかった。通常、支配者は、公共的福祉の実行をもって、その権威を被支配層に認めさせた。アイユーブ朝は、先述の如くイエメンに初めてマドラサを導入したにもかかわらず、その建設は極くわずかなものであった。しかしラスール朝もまたアイユーブ朝とともにイエメン入りした外国人勢力であったが、彼らは、イエメンの諸都市、とりわけザビードに数多くのマドラサ等の諸施設を建設し、ウラマーを集中させることによって、そこを学術都市とした。これによって、彼らは、イエメン土着の人々に対して、その権威を認めさせようとしたのである。そしてそれは、即ちラスール朝によるイエメン支配の正当性を主張することを意味していた。

二点目は、ザイド派との関係であった。ザイド派 Zaydi とは、Zayd b. ‘Alī を創始者とするシーア派の一分派である。この派は、カスビ海南岸地域とイエメンとに広がっていた。とりわけイエメンにおいてザイド派が展開していたのは、サアダやサナアを中心とした北イエメンであった。ザイド派は、この地に割拠していた諸部族に受け入れられていた。

ザイド派はティハーマに勃興した諸王朝が弱体化すると、部族を従え絶えず南侵してきた。それは、イエメン全域を支配したラスール朝時代においても同様であった。ラスール朝時代の年代記には、イマームに率いられたザイド派勢力の活動を見ることができる。このようなザイド派勢力に対して、ラスール朝は軍事的活動を展開することによって、彼らを制圧した。

しかし一方でザイド派には著名なウラマーが出現し、ザイド派は大いに伸長していた。Ḥumayd b. Aḥmad al-Muḥallī (d. 652/1254) は、ザイド派の歴史家であり、ザイド派イマームの伝記等を著した。⁽⁴⁸⁾ Amir Ḥusayn b. Badr al-Dīn (d. 656/1249) は現代イエメンにおいても権威ある書として用いられているハディース集を編集した。⁽⁴⁹⁾ また al-Faḍl b. Abī al-Sa'd al-'Uṣayfirī (d. 614/1217) は、ザイド派法学の発展に大いに貢献した人物であった。⁽⁵⁰⁾

ラスール朝支配権力はスンナ派政権として、このようなシーア派の一分派であるザイド派に対し、スンナ派勢力の維持と拡大を図った。そのためにラスール朝は、ザイド派に対するフナ派のイデオログたちの育成のために、ザビードを学術都市として「建設」をしたと考えられる。

む す び

イエメンのティハーマにあったザビードは、当初、軍事的な目的によって建設された都市であった。しかし、ラスール朝時代になると、スルタンら支配権力によって、数多くのマドラサ等が建設された。それによってザビードは、従来とは大きく異なった景観をなした。イエメン中のウラマーは、ここを中心にその師弟関係を展開した。この意味でザビードは、他のイエメン諸都市とは違い、まさに学術都市の様相を呈したのであった。ラスール朝によるザビードの「建設」の目的は、その支配の正当性を主張することと、ザイド派勢力に対するスンナ派勢力の維持・拡大を目的としたものであった。このようなラスール朝の活動は、今日、イエメンに見られるシーア派とスンナ派との分布の端緒になったと思われる。

注

- (1) 家島彦一『海が創る文明—インド洋海域世界の歴史』朝日新聞社、1993年、などの氏の一連の研究。
- (2) D. Thomas Gochenour, "A Revised Bibliography of Medieval Yemeni History in Light of Recent Publications and Discoveries", *Der Islam*, 63-2, 1986, pp. 309-322.
- (3) J. Chelhod, "Introduction à l'histoire sociale et urbaine Zabid", *Arabica*, 25-1, 1978, pp. 48-88.
- (4) E. J. Keall, "The dynamics of Zabid and its hinterland: the survey of a town on the Tihamah of North Yemen", *World Archaeology*, 14-3, 1983, pp.

- (5) Ibn al-Dayba, *al-Faḍl al-Mazid ‘alā Bughyat al-Mustafid fī Akhbār Zabīd*, ed. J. Chelhod, Ṣan‘ā’, 1983, p. 51. (以後 *Akhbār* と略す。) Ibn al-Dayba, *Qurrat al-‘Uyūn fī Akhbār al-Yaman al-Maymūn*, ed. M. al-Akwa, 1988, Ṣan‘ā’, pp. 228-9. (以後 *Qurrat* と略す。) ‘Abd al-Muḥsin Mad‘aj M. Mad‘aj, *The Yemen in early Islam 9-233/630-847 a political history*, London, 1988, p. 211., Yahyā b. al-Ḥusayn b. al-Qāsim, *Ghāyat al-Amānī fī Akhbār al-Quṭr al-Yāmānī*, ed. Ashour, S. A. F., 2vols., Cairo, 1968, vol. 1, pp. 150-1. (以後 *Ghāyat* と略す。)
- (6) Tāj al-Dīn ‘Abd al-Bāqī al-Yamānī, *Bahjat al-Zaman fī Tārīkh al-Yaman*, Ṣan‘ā’, 1988, p. 38. (以後 *Bahjat* と略す。)
- (7) イエメンの諸王朝の勃興に関しては以下を参照した。S. Lane-Poole, *The Mohammadan Dynasties*, 1925, pp. 90-101.
- (8) al-Hamdānī, *Ṣifat Jazīrat al-‘Arab*, ed. D. H. V. Mueller, Leiden, 1884-1891, p. 56. (以後 *Ṣifat* と略す。)
- (9) D. M. Varisco, “A Royal Crop Register from Rasulid Yemen” *JESHO*, 34-1, 1991, pp. 1-22. この論文内に登録簿が翻訳されている。なお原本は未刊行。
- (10) Ibn al-Mujāwir, *Ṣifat Bilād al-Yaman wa Makka wa Ba‘ḍ al-Ḥijāz al-Musammāt Ta’rīkh al-Mustabṣir*, ed. O. Lofgren, Leiden, 1951-1954, p. 63. (以後 Ibn al-Mujāwir と略す。)
- (11) Ibn Khurdadhbīh, *Kitāb al-Masālik wa al-Mamālik*, ed. De Goeje, Leiden, 1889, pp. 147-8.
- (12) al-Khazraji, *al-‘Uqūd al-Lu’lu’iyya fī Tārīkh al-Dawla al-Rasūliyya*, 2vols., Ṣan‘ā’, 1983, vol. 2, p. 247. (以後 *al-‘Uqūd* と略す。)
- (13) *Bahjat*, p. 140, *Ghāyat*, vol. 1, p. 418, *al-‘Uqūd*, vol. 1, p. 53.
- (14) Ibn al-Mujāwir, p. 74.
- (15) E. J. Keall, *op. cit.*, p. 348.
- (16) 『イスラム事典』, 平凡社, 1982年, 452頁。
- (17) *Akhbār*, p. 80.
- (18) *Qurrat*, p. 285.
- (19) *Akhbār*, p. 85., *Bahjat*, p. 135. なおこの記事以外には、アイユーブ朝の最後のイエメン統治者マスウードのザビードにおけるマドラサの再建記事がある。
Ghāyat, vol. 1, p. 417.
- (20) *Akhbār*, p. 103, *al-‘Uqūd*, vol. 2, p. 203, *Qurrat*, p. 382.
- (21) *Akhbār*, p. 91.
- (22) *al-‘Uqūd*, vol. 2, p. 180.
- (23) *Akhbār*, p. 105, *Qurrat*, p. 380, *al-‘Uqūd*, vol. 2, p. 64.

- (24) *al-'Uqūd*, vol. 2, pp. 134-5.
- (25) al-Qalqashandī, *Ṣubḥ al-A'shā*, 14vols., Cairo, 1353-55 A. H., vol. 5, p. 31.
- (26) *al-'Uqūd*, vol. 2, p. 160.
- (27) *al-'Uqūd*, vol. 1, p. 354, *Bahjat*, p. 284, 家島彦一「イエメン・ラスール朝史に関する新写本」『アジア・アフリカ言語文化研究』7, 1974年, 166頁。
- (28) *Bahjat*, p. 181, *al-'Uqūd*, vol. 1, p. 320.
- (29) “FĪRŪZĀBĀDĪ”, *E. I.*, new ed., vol. 2, pp. 926-7.
- (30) al-Maqrizi, *Kitāb al-Sulūk li-Ma'rifat Duwal al-Mulūk*, ed. N. Ziada, A. F. 'Ashūr, and H. Rabie, 5vols., Cairo, 1934-1977, vol. 4, pp. 296-7.
- (31) *Ghāyat*, vol. 2, p. 550, *Qurrat*, pp. 382-3, *al-'Uqūd*, vol. 2, pp. 218-9, 229, 244, 247.
- (32) 湯川 武「ウラマー遊学の世界」『世界史への問い』8, 岩波書店, 1990年, 225-248頁など氏の一連のウラマーに関する研究を参照のこと。
- (33) al-Sakhāwī, *al-Daw' al-Lāmi' li-Ahl al-Qarn al-Tāsi'*, 12 vols., Cairo, 1353-1355 A. H., vol. 5, p. 210.
- (34) 'Umari, *Masālik al-Abṣār fī Mamālik al-Amṣār*, Cairo, p. 155. (以後 'Umari と略す。)
- (35) Ibn Baṭūṭa, *Rihla Ibn Baṭūṭa*, 2vols., Cairo, 1933, vol. 1, pp. 194-5. (以後 Ibn Baṭūṭa と略す。) イブン・バットゥータ『三大陸周遊記』前嶋信次訳, 角川書店, 1989年, 108頁。
- (36) R. B. Serjeant, “A Journey by Two Jesuits from Dhufār to San'ā' in 1590”, *The Geographical Journal*, 115, 4-6, 1950, p. 203 に Serjeant によって引用されている。
- (37) al-Harawī, *Kitāb d-Ishārāt ilā Ma'rifat al-Ziyārāt*, Damascus, 1953, p. 97., R. B. Serjeant, “Hūd and Other Pre-Islamic Prophets of Ḥaḍramawt”, *Le Museon*, 67, 1954, p. 128.
- (38) *Ṣifat*, p. 201.
- (39) 初期イスラム時代イエメンの重要人物。 *E. I.*, old ed., vol. 4, pp. 142-44, W. Madelung, “Islam in Yemen”, *3000 Years of Art and Civilization in Arabian Felix*, ed. D. Wener, Innsbruck, 1987, pp. 174-177, 'Umar b. 'Alī, *Ṭabaqāt Fuqahā' al-Yaman*, ed. Fu'ād Sayyid, Cairo, 1958, p. 57.
- (40) ザイド派に関する古典的研究としては C. van. Arendonk, *Les débuts de l'Imamat zāidite au yemen*, Leiden, 1960. があるが, 中世イエメン史における同派の動向に関しては D. T. Gochenour, *The Penetration of Zaydi Islam into Early Medieval Yemen*, Ph. D. Dissertation, Harvard University, 1984 に詳しい。
- (41) 'Umari, p. 156.
- (42) Yāqūt, *Mu'jam al-Buldān*, 6vols, Leipzig, 1866-1873, vol. 1, p. 54.

- (43) Ibn al-Mujāwir, vol. 2, p. 156.
- (44) Ibn Baṭūṭa, vol. 1, p. 192, イブン・バットゥータ, 前掲書, 107頁。
- (45) Ibn al-Athir, *al-Kāmil fī al-Tārikh*, 13vols., Beirut, 1965–7, vol. 11, pp. 397–8.
- (46) 家島彦一, 前掲書, 135–6頁。
- (47) *Qurrat*, p. 287.
- (48) *al-‘Uqūd*, vol. 1, p. 115., Fu‘ād Sayyid, A., *Sources de l’histoire du Yémen à l’époque musulmane/Maṣādir tārikh al-Yaman fī al-‘aṣr al-islāmī*, Cairo, 1974, pp. 127–8.
- (49) al-Ḥibshī, *Maṣādir al-fikr al-‘arabī al-islāmī fī al-Yaman*, San‘ā’, n. d., p. 109.
- (50) al-Ḥibshī, *ibid.*, p. 260.

* 本稿の作成にあたって、拓殖大学の飯森嘉助教授、上智大学の松本弘氏から貴重なご蔵書を拝見させて頂きました。記して深甚の謝意を表します。

【ラスール朝時代のマドラサの諸建設物】

略記号

Md.~Madrasa, Mj.~Masjid, J.~Jāmi‘

A~*Akhbār*, G~*Ghāyat*, M~*Madāris*, Q~*Qurrat*, ‘U~‘*Uqūd*,

641/1243 (建設年: ヒジュラ暦/西暦)

Nūr al-Dīn, (建設者: 初代スルタン)

Md. al-Manṣūriyya (建設物), Mekka (場所). (Gl. 426., Q312.) (出典)

626-647/1228-1249

Nūr al-Dīn,

Md. al-Wazīriyya, Ta‘izz. (A90., Q312., ‘U1, 82.)

Md. 名称不明, ‘Adan. (A90., Q312., ‘U1, 82.)

Md. (3校), Zabid, (A90., Q312., ‘U1, 82.)

al-Dār al-Najmi

Md. al-Ṣahābiyya, Jibla. (‘U1, 135.)

al-Dār al-Najmi の従者

Md. al-Burḥa, al-Naqīlī. (‘U1, 355.)

654/1256

Tāj al-Dīn (宦官)

Md. al-Tājiyya, Zabid. (A91., M176., Q335., ‘U1, 113.)

Md. al-Tājiyya, Ta‘izz. (‘U1, 113.)

Md. al-Qurrā’, Zabid. (A91., M180., Q335., ‘U1, 113.)

迎賓館 Dār Muḍayf, 場所不明. (A91., Q335., ‘U1, 113.)

Md. 名称不明. al-Wāḥiz. (‘U1, 113.)

658以前/1259

Niẓām al-Dīn (宦官)

Md. Niẓāmiyya. Zabid. (A91., M97., ‘U1, 152.)

Mj. al-Ṣābiq al-Niẓāmi, Ta‘izz. (‘U1, 152.)

Md. 名称不明, Jibla. (‘U1, 152.)

Md. 名称不明, al-Waḥṣ. (‘U1, 152.)

Asad al-Dīn (スルタン・ヌール・アッディーンの伯父)

Md. al-Asadiyya, Ibb. (‘U1, 179.)

Md. al-Asadiyya, al-Khabālī. (Q327., ‘U1, 179.)

ダム, al-Qarafa. (‘U1, 179.)

659/1259

al-Muẓaffar (第2代スルタン)

ミナレット, Ḥarām al-Ṣarīf. (‘U1, 120.)

667以前/1268

Najm al-Din (スルタン・ムザッファルの兄弟)

Md. al-‘Umariya, Ta‘izz. (‘U1, 154.)

Şaraf al-Din (ラスール家の人物)

Md. al-Şarāfiya, Jibla. (‘U1, 135.)

681以前/1282

Muḥammad. b. Najāh. (アミール)

Md. al-Najāhiya, Ta‘izz. (‘U1, 169.)

Md. al-Najāhiya, Jibla. (‘U1, 169.)

647-694/1249-1294

al-Muẓaffar (第2代スルタン)

Md. al-Muẓaffariya, Ta‘izz. (A91., G1, 475., Q335., ‘U1, 232-233.)

J. 名称不明, Dhū ‘Udayna. (A91., G1, 475., Q335., ‘U1, 232-233.)

迎賓館 Dār Muḍayf, 場所不明. (Q335., ‘U1, 232-233.)

J. al-Muẓaffari, al-Mahjam. (G1, 475., Q335., ‘U1, 232-233.)

J. 名称不明, Wāsiṭ al-Maḥālib. (G1, 475., ‘U1, 232-233.)

Md. 名称不明, Ḥafār al-Ḥabūḍi. (G1, 475., Q335., ‘U1, 232-233.)

al-Muẓaffar の妻

Md. al-Dār al-Asad, Ta‘izz. (A91.)

687以前/1288

Iftikhār al-Diin (宦官)

Md. Yāqūtiya, Maṣūrat al-Dumluwa. (‘U1, 212.)

694-696/1294-1296

Ashraf ‘Umar (第3代スルタン)

Md. Ashrafiya, Ta‘izz. (A94.)

695以前/1295

al-Dār al-Shamsi (スルタン・ムザッファルの姉)

Md. Shamsiya, Zabid. (A91., ‘U1, 246.)

Md. Shamsiya, Ta‘izz. (A91., ‘U1, 246.)

712以前/1312

Maryam (スルタン・ムザッファルの妻)

Md. Maryam, Zabid. (A91., ‘U1, 288.)

Md. 名称不明, Majraba/Ta‘izz. (‘U1, 288.)

Md. al-Sābiqiya, Zabid. (M160., ‘U1, 288.)

Md. al-Sābiqiya, Dhū ‘Uqaida. (‘U1, 288.)

Badr al-Din (アミール)

Md. al-Hakkāriya, Zabid. (M213., ‘U1, 294.)

702/1302

Mu'ayyad (第4代スルタン)

Md. 名称不明, Majraba. (G1, 495., 'U1, 285.)

Md. Mu'ayyadiya, Ta'izz. (G1, 495., Q348., 'U1, 285.)

Md. 'Afifiya, Zabid. ('U2, 93.)

704以前/1304

Mu'ayyad の妻

Md. 名称不明, Ta'izz. ('U1, 300.)

712以前/1312

Muẓaffar (Mu'ayyad の息子)

Md. 名称不明, Maḥārib. ('U1, 330.)

718以前/1318

Dār al-Dumluwa Nabila (ムザッファルの娘)

Md. Ashrfiya, Zabid. (A91., M196., Q348., 'U1, 350.)

Md. 名称不明, Ta'izz. (Q348., 'U1, 350.)

Mj. 名称不明, Sabir 山. ('U1, 350.)

Md. 名称不明, Ḥafār al-Ḥabūdī. (Q348., 'U1, 350.)

734/1333

Mujāhid (第5代スルタン)

J. 名称不明, Ta'izz. (A99., Q368.)

740/1339

Mujāhid

泉 sabil 建設 (A97.)

Md. al-Mujāhidiya, Mekka. (G2, 519., Q368., 'U2, 78.)

721-764/1321-1362

Mujāhid

Md. al-Mujāhidiya, Ta'izz. (A99., G2, 519., Q368.)

J. 名称不明, Tha'bāt. (A99.)

J. 名称不明, al-Nuwaitra/Zabid. (A99., G2, 519.)

730/1329

Āmina (Mujāhid の母)

Md. al-Mujāhidiya al-Ṣalāḥiya, al-Mujailiya 村. (A99.)

Md. al-Ṣalāḥiya, Zabid. ('U2, 65.)

Md. al-Salāma. (A99.)

Md. 名称不明, Zabid. (A99.)

Khānqāh, Zabiid. (A99.)

Khānqāh al-Ṣalāḥiya, Musallab 村. (A99.)

- Mj. 名称不明, Mīmīlāḥ の村. (A99.)
Mj. 名称不明, Turaiba の村. (A99.)
Mj. 名称不明, (3 施設) Zabīd. (A99.)

768以前/1366

Mā'al-Samā' (Mayyad の娘)

- Mj. 名称不明, al-Rabaḍ. (A100.)
Mj. 名称不明, Zabīd. (A100.)
Md. al-Fāṭimiya, Zabīd. (A100., M237.)
Md. al-Wāṭiqiya, Zabīd. (A100.)

771-779/1369-1377

Ibn Mikā'il (アミール)

- Md. Muḥammad b. Mikā'il, Zabīd. (M251., 348.)

764-78/13627-1376

al-Afḍal (第6代スルタン)

- Md. al-Afḍaliya, Ta'izz. (A102., G2, 526.)
Md. 名称不明, Mekka. (A102., G2, 526., Q376.)

798-801/1395-1398

al-Ashraf (第7代スルタン)

- Md. Ashrafiya al-Kubra, Ta'izz. (A104.)
Md. 名称不明, Ta'izz. (A104., Q386.)
J. 名称不明, Zabīd. (Q386.)

836以前/1432

Hurra Jihat (Ashrafの妻)

- Md. Farḥāniya, Zabīd. (A108., M289., Q391.)

832/1428

al-Zāhir (第11代スルタン)

道路建設と補修 (A118.)

Barqūq (アミール)

- Mj. al-Ashāir の拡張, Zabīd. (A112.)

835/1431

al-Zāhir

- Md. 名称不明, Zabīd. (Q398.)
Md. al-Zāhiriya の建設命令, Ta'izz. (A112., Q398.)
Md. 名称不明, 'Adan. (A112.)
J. の改修, Janad. (A112., Q398.)
al-Ṭāhira (al-Zāhir の妻)
Md. al-Yāqūtiya, Zbīd. (A112., M308.)

年代・建設者不明

- * Md. al-Ashrafiya, Jibla. ('U1, 354.) * Md. al-Tarbiya, Zabid. ('U2, 180.)
- * Md. al-Jibābii, 場所不明 ('U1, p. 262.) * Md. Ibn al-Jilād, Zabid. ('U2, 150.)
- * Md. al-Da'āsiya, Zabid. ('U1, 155.) * Md. al-Rābiya, Jibla. ('U1, 217.)
- * Md. al-Rashidiya, Ta'izz. ('U1, 217.) * Md. al-Sayfiya, Dhuhbān. ('U1, 309.)
- * Md. al-Sayfiya al-Ṣaghira, Zabid. ('U2, 180.)
- * Md. al-Sayfiya al-Kabira, Zabid. ('U2, 180.)
- * Md. al-Sh'a,riya, al-Mawza'. ('U1, 143.) * Md. al-Ṣālhiya, Zabid. ('U1, 65.)
- * Md. al-Āṣimiya, Zabid. ('U1, 205.) * Md. al-'Afifiya, Zabid. ('U2, 93.)
- * Md. al-Ghazāliya, Ta'izz. ('U2, 69.) * Md. al-Qātiniya, Zabid. ('U2, 180.)
- * Md. al-Mujayriya, Ta'izz. ('U1, 74.) * Md. al-Musalliba, Zabid. ('U2, 180.)
- * Md. al-Mu'attibiya, Ta'izz. ('U1, 209.) * Md. al-Muazziya, Ta'izz. ('U1, 73.)
- * Md. al-Wāthiqīn, Zabid. ('U2, 30.)

イエメン地図

横 1/7040000 0 km 100 200 300
縦 1/8540000 0 km 100 200 300